

第70回

# 日本実験動物学会総会のご案内

The 70th Annual Meeting of the Japanese Association for Laboratory Animal Science



語ろう実験動物 ~よい広く・よい深く~

会 期 2023年 5月24日(水)~26日(金)  
会 場 つくば国際会議場 (つくば市)



大会 長： 杉山文博

大会事務局：第70回日本実験動物学会総会 事務局  
〒305-8575 茨城県つくば市天王台 1-1-1  
筑波大学 生命科学動物資源センター内  
TEL: 029-853-3382  
E-mail: [jalas70@md.tsukuba.ac.jp](mailto:jalas70@md.tsukuba.ac.jp)

大会ホームページ： <https://cfmeeting.com/jalas70/>

大会委員会：

組織委員会

委員長 吉木 淳 (理研 BRC)

副委員長 國田 智 (自治医科大)

財務委員会

委員長 影山 靖 (日本クレア)

副委員長 高倉 彰 (実験動物中央研究所)

プログラム委員会

委員長 高橋 智 (筑波大)

副委員長 小倉 淳郎 (理研 BRC)

実行委員会委員会

委員長 小山 公成 (ケー・エー・シー)

副委員長 上田 尚 (ジャクソン・ラボラトリー・ジャパン)

情報交換会

統括 加藤 克彦 (ジャクソン・ラボラトリー・ジャパン)

事務局

統括 水野 聖哉 (筑波大)

## 1. 演題募集について

演題登録期間：2022年12月1日(木)~2023年1月20日(金)

詳細につきましては、大会ホームページをご覧ください。

### ■応募方法

- ・オンラインでのみ演題受付させていただきます。

- ・発表希望者は、和文抄録と英文抄録の両方の提出が必要です。

#### ■応募資格・発表資格

- ・一般セッション（口演もしくはポスター発表）及び優秀発表賞セッション（口演とポスター発表）での発表者は、日本実験動物学会 会員に限ります。また、原則として 1 人 1 演題とします。（一般演題については AFLAS 会員も発表可能とします）

#### ■発表方法

- 1) 口頭発表…PC プロジェクターを用いた口頭発表を行います。
- 2) ポスター発表…ポスター発表の示説・討論は、2023 年 5 月 24 日（水）、25 日（木）の午後 1 時間（16：30～17：30）を予定しております。

## 2. 参加費・情報交換会の事前登録について

**事前参加登録期間：2022 年 12 月 1 日（木）～2023 年 4 月 14 日（金）**

#### ■事前参加登録方法

- ・参加費及び情報交換会費の事前登録は、大会ホームページからご登録ください。
- ・事前登録締切日以降、Web からの登録はできません。当日、受付にてご登録ください。  
なお、参加登録後のご返金は致しかねますので、ご了承願います。
- ・企業様名義等で複数名分の参加費をまとめてお支払される場合は、どの方の参加費かを明確にするため、入金日、合計金額、該当の参加登録番号、参加名を通信欄にご記載いただくか、メールで上記大会事務局にご連絡ください。
- ・事前登録された方には「事前登録受付メール」が送信されます。メールの内容をよくご確認の上、2023 年 4 月 14 日（金）までにお支払手続きをお願いいたします。万が一メールが到着しない場合は、下記参加登録担当（※）までお問合せください。

#### 【大会参加費】

区分	事前登録	当日登録
正会員	10,000 円	13,000 円
学生会員	3,000 円	5,000 円
非会員	13,000 円	17,000 円
関連学会員 <sup>1)</sup>	11,000 円	14,000 円
学部学生 <sup>2)</sup>	-	無料

#### 【情報交換会費】

区分	事前登録	当日登録
正会員・非会員	8,000 円	10,000 円
学生会員	6,000 円	8,000 円

- 1) （公社）日本獣医学会、日本製薬工業協会、サル類の疾病と病理のための研究会、筑波実験動物研究会 日本毒性学会、日本実験動物技術者協会
- 2) 発表しない学部学生が対象です。当日登録にのみであり、学生証の提示が必要となります。

#### ■プログラム集と領収書兼ネームカードの発送について

参加費のお申し込み後、ご入金いただいた方には、プログラム集と領収書兼ネームカードを発送させていただきます。発送は、2023年5月上旬頃の予定です。

なお、2023年5月17日（水）までに到着しない場合は、下記参加登録担当までご連絡ください。

※ 参加登録担当：事前参加登録関連、プログラム集・領収書兼ネームカード発送に関する問合せ先  
株式会社コンベンションアシスト  
第70回日本実験動物学会総会 担当：大川 忠司  
TEL: 048-400-2790  
Email: [jalas70@cfmeeting.com](mailto:jalas70@cfmeeting.com)

#### ■託児室の設置について

託児室を会場内に設置いたします（有料）。大会ホームページにて利用規約をご確認いただいた上で、ご希望される方はWEBにて事前予約ください。

### 3. 広告・ランチョンセミナー等のご案内

広告（プログラム集）・バナー（大会ホームページ）・スクリーン広告（会場）・ランチョンセミナー・ホスピタリティールーム等の申込詳細につきましては、大会ホームページをご覧ください。

### 4. 大会日程概要

- 2023年5月23日（火）：前日  
常務理事会、理事・評議員懇談会、理事・監事・評議員情報交換会
- 2023年5月24日（水）：初日  
特別講演Ⅰ、シンポジウムⅠ、LASセミナーⅠ、優秀発表賞口頭発表、一般演題口頭発表、一般演題ポスター発表、ランチョンセミナー、器材展示、ホスピタリティールーム、各種関連会議
- 2023年5月25日（木）：2日目  
特別講演Ⅱ、総会・学会賞授与式・受賞講演、シンポジウムⅡ～Ⅳ、LASセミナーⅡ、一般演題ポスター発表、ランチョンセミナー、器材展示、ホスピタリティールーム、各種関連会議、情報交換会
- 2023年5月26日（金）：最終日  
シンポジウムⅤ～Ⅷ、LASセミナーⅢ、ランチョンセミナー、器材展示、ホスピタリティールーム、各種関連会議

## 5. 情報交換会

日時：2023年5月25日（木）18：30～20：30（予定）

会場：ホテル日航つくば（予定）

## 6. 特別講演，シンポジウムおよびLASセミナー概要

### 1) 特別講演 I

中内 啓光（スタンフォード大／東京医科歯科大）

「異種キメラの生物学と医学への応用」

### 2) 特別講演 II

櫻井 武（筑波大）

「遺伝子改変マウスによる新規神経ペプチド産生ニューロンの機能解明」

### 3) シンポジウム

#### I. 「実験動物を用いた医学実装へのアプローチ」（大会企画）

コーディネーター：金井 正美（東京医科歯科大）、國田 智（自治医科大）

医学、生命科学は人類の健康維持のために多くの貢献を成してきた。その実現の裏には多くの実験動物の貴重な生命を借りていることがいかに大切かは言うまでもない。現代医学研究においては、先進医療技術開発さらに革新的創薬や医工学分野へもその範囲は広がりを見せている。また、新しい医療技術や医療機器の開発をそのまま臨床応用することはリスクが大きく、前段階としての実験動物への応用が社会的にも求められる。本日のシンポジウムでは、前臨床段階としての橋渡し研究とヒトへのアプローチとして様々な実験動物を用いた最先端研究を紹介する。

#### II. 「宇宙生物学における動物実験のこれまでとこれから」（大会企画）

コーディネーター：高橋 智（筑波大）、吉木 淳（理研 BRC）

国際宇宙ステーション（ISS）は、日本、米国、ロシア、欧州、カナダなどの世界15カ国が協力して、地上から約400km上空に建設された巨大な有人実験施設である。1998年に宇宙での建設が始まり、2011年7月に完成した。現在の計画では2030年までの運用を予定している。日本は、ISSに宇宙実験棟「きぼう」を有しており、「きぼう」を利用して、様々な宇宙生物学実験が実施されてきた。本シンポジウムでは、これまで行われてきた様々な動物実験の中から、線虫、メダカ、マウスを用いた実験の概要とその成果、さらには、現在計画されている月や火星探査に向けた宇宙における動物実験について発表していただき、宇宙生物学における動物実験のこれまでとこれからについて議論する。

### III. 「IVCシステムを用いたげっ歯類実験動物の飼育と管理」

(実験動物感染症対応委員会企画)

コーディネーター：丸山 滋 (ジャクソン・ラボラトリー・ジャパン)、山田 梓 (ラビックス)

個別換気ケージ (IVC) システムは現在、国内外を問わず実験用げっ歯類の飼育方法の一般的な選択肢となっています。IVC システムは高度の封じ込めを行うことができる構造であること、比較的扱いやすいこと、アレルギーからも高度な保護ができることなどの魅力的な面がたくさんあります。一方で、適切な管理方法の構築こそが、この有用なシステムを生かすとも言えます。皆さんのIVC施設の微生物管理は完璧といえる状態でしょうか。日々の飼育管理の中で疑問に思っていることはありませんか。本シンポジウムでは、IVC設備を導入している施設の様々な事例紹介を通じ、皆さんの施設管理の参考にしていただけたらと考えています。

### IV. 「難治性疾患に立ち向かう核酸医薬の最前線」(日本実験動物医学会との共催)

コーディネーター：越後谷 裕介 (日本大獣医)、大沼 健太 (日本たばこ産業)

DNA/RNA 様の人工核酸からなる「核酸医薬」は、難治性疾患に対する新たな治療手段として注目されている。特に「RNA」を治療標的とする核酸医薬は、抗体医薬や低分子医薬と並ぶ創薬プラットフォームになることが期待されている。実際に2013年から複数の核酸医薬品が日米欧で次々に承認されており、急速に実用化が進んでいる。目覚ましく進展する核酸医薬の研究開発において、実験動物学分野の果たす役割は今後益々大きくなると考えられる。本シンポジウムでは、核酸医薬分野の最前線で活躍されている三名の先生方に、有効性・安全性評価を含む総論、遺伝性疾患に対する国内承認例、さらには日本発の革新的技術開発についてご講演をいただく。本講演により核酸医薬の現状を共有いただき、両分野の相互発展につながる議論の場となれば幸いである。

### V. 「感覚研究の最前線と実験動物学の新展開」(学術集会委員会企画)

コーディネーター：吉川欣亮 (東京都医学総合研究所)、小出 剛 (国立遺伝学研究所)

我々の感覚器は、情報感受・理解、環境適応、危険察知に機能し、人間生活および社会生活を維持するために重要である。感覚器の障害や、加齢による機能低下は生活の質を低下させ、認知症や、うつ病、発達障害などの精神疾患の危険因子となることも示唆されている。「五感」と呼ばれる視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚を中心とした感覚研究は、末梢の感覚細胞群から、感覚細胞からの情報を伝達する神経細胞群、さらに脳における感覚処理にいたるまで広く展開されており、その研究の発展には実験動物が大きく貢献している。

本シンポジウムには感覚研究の国内トップランナーにお集まり頂きご講演をお願いした。特に今回のシンポジストのご講演は、最新の感覚研究に加え、感覚の動物飼育への影響、医工連携による技術開発、実験動物では捕捉出来なかったヒトとの種差を埋める *in vitro* 技術など、今後の実験動物学の発展へ貢献し、影響を与えることが期待される研究成果も含まれており、多くの学会員が楽しめる内容となっている。

VI. 「実験動物試験における、アカデミア「研究公正」と医薬「信頼性基準」～相互理解から生まれる医薬品開発エコシステムへの挑戦～」（日本製薬工業会との共催）

コーディネーター：渡部 一人（製薬協医薬品評価委員会基礎研究部会・元中外製薬）、鈴木 睦（製薬協医薬品評価委員会基礎研究部会・協和キリン）

3Rs の浸透に伴い、実験動物を用いた試験の必要性や試験系の妥当性が厳密に検討されている。医薬品業界でも ICH ガイドラインで常に動物数の利用数の削減等を念頭に議論が重ねられている。一方、本当にヒトに投与する価値を有しているかの見極めである薬効薬理や安全性の確認に実験動物を用いた試験は欠かせなく、ヒト臨床試験前には各種の動物を用いた試験が規定されている。医薬品承認申請時に「申請資料としての薬効薬理」として扱う試験は、有効性を裏付けることが求められる点で、単に探索的な「学術、創薬のための薬効薬理」と相違がある。近年では、医薬品開発におけるエコシステムが認識され、学術・創薬のための試験からシームレスに申請に至ることが可能となれば開発期間が短縮、3Rs や創薬活動の SDGs にも貢献できる。エコシステムを実現するポイントとなる信頼性や Data Integrity を中心に本シンポジウムでは議論を進める。

VII. 「サル類を取り巻く感染症～現状と対策～」（サル類の疾病と病理のための研究会との共催）

コーディネーター：板垣 伊織（予防衛生協会）、山海 直（医薬基盤健康・栄養研究所）、中村 紳一朗（麻布大）

飼育下のサル類を取り巻く環境はいま、重大な転換点を迎えている。日本で長年にわたりサル類の結核の検査に汎用されてきた「動物用ツベルクリン」の製造・販売が終了し、海外から輸入せざるを得ない事態となった。一方、COVID-19 の世界的感染爆発による新規治療・予防薬の開発の急増が研究用サル類の需要増大を喚起した。その結果、販売価格が生産国レベルで以前の数倍にまで急騰している。多岐にわたるヒトとの共通性から、実験動物としてのサル類はあらゆる分野の医科学研究に必須なのは言うまでもない。しかし、いまや日本のサル類を用いる試験研究は、種々の「感染症」をとりまく状況から大変不安定な状況となってしまった。本シンポジウムではサル類とヒトを取り巻く環境の変化を「感染症」の観点から取り上げ、医科学研究用サル類、そしてサル類を用いた研究の今後を考えてみたい。

## VIII. 「動物実験機関管理の実績と今後の発展に向けて」（日本実験動物学会企画）

コーディネーター：國田 智（自治医科大）、渡辺秀徳（日本たばこ産業）

本邦における動物実験は機関管理の下で行われているが、次期「動物の愛護及び管理に関する法律」の改正では3Rsの義務化や動物実験施設の動物取扱業への追加が議論されることになっており、動物実験の機関管理は現在岐路に立っている。高度化する動物実験のフレキシブルかつタイムリーな実施を促進するためにも、各機関での自主・自律性を重んじる機関管理が望ましいと我々は考えている。本シンポジウムでは、これまでに推進してきた機関管理の取組みと実績を振り返るとともに、今後の機関管理発展のための方策と課題について議論を進める。

### 4) LAS セミナー（教育研修委員会企画）

#### I. 「3Rs に配慮した実験動物技術の最新知見と研究応用」

コーディネーター：新美 君枝（理研 CBS）、小木曾 昇（国立長寿医療研究センター）

適正な動物実験を推進するには基本的な実験動物技術（手技）を習得することが重要です。昨今のコロナパンデミックの影響から動物実験に関わる実験動物技術も様々な工夫が行われています。本セミナーでは、「米国獣医学会（AVMA）動物の安楽死指針：2020年版の解説」を含めた麻酔・安楽死法をはじめに、現場の獣医学的なケア、齧歯類や霊長類の個体識別方法、その手法を用いた行動研究の応用等、最新の話題について提供したい。

#### II. 「いまから始めるウイルスベクター」

コーディネーター：三浦 竜一（東京大学）、磯谷 綾子（奈良先端大）

1980年代に確立された人為的に改変したDNAを細胞内に導入し、遺伝子を発現させる遺伝子組換え技術は、生命科学研究には欠かせない技術となっている。遺伝子組換えを行うには、細胞の中にDNAを入れる必要があり、特にウイルスベクターは、効率よく細胞内へDNAを運ぶ方法として使われている。

現在では様々なウイルスベクターが開発され利用できるようになったが、初めて利用する場合はどのように入手・作製すればいいのか、動物実験に用いるにはどのような設備を準備しなければならないのか、など実際の利用は少しハードルが高い。

本セミナーでは、ウイルスベクターの入門者に向けて、レンチウイルスベクター、アデノウイルスベクター、アデノ随伴ウイルスベクター、ステルス型RNAウイルスベクターの専門家の方々に、それぞれの特徴や適用方法などをご講演いただく。ウイルスベクター入門者の方々には、自身の研究や実験動物施設の運営管理に役立てていただきたい。

### Ⅲ. 「知りたい！実験動物 part 2」

コーディネーター：清成 寛（理研 BRD）、井上 貴史（実験動物中央研究所）

試験・研究の目的の達成には動物実験において適切な動物種を選択することが重要となる。そこで、新たな実験動物種の使用を検討するにあたって、あらためてその実験動物の特性を理解し、動物の入手、飼育管理、ハンドリングなど取り扱いの基本（下記事項）を学ぶ機会を提供する。既に対象の実験動物種を使用している人にも復習と飼育や取り扱い方法の改善の参考にしていただきたい。今年は昨年続く part 2 として、近年その有用性が注目されているユニークな特性をもつ小動物種の中から、「キリフィッシュ」、「ソメワケササクレヤモリ」、「スunks」、「コットンラット」をとりあげる。

## 7. 協力・後援

協力：社団法人つくばコンベンション協会

後援：つくば市（予定）

筑波大学

筑波実験動物研究会